

に何處かへ飛び出して行つたのです。あなたの様に、兄さんの一舉一動を心配する人から見たら、仰向けに寐そべつた其時の私の姿は、少し香氣過ぎたかも知れませんが、是は固より私の鈍い神経の仕業に違ひないのです。けれども唯鈍い丈で説明する以外に、もう少し御参考になる點も交つてゐるやうですから、夫を一寸申上げます。

私は兄さんの頭を信じてゐました。私よりも鋭敏な兄さんの理解力に尊敬を拂つてゐました。兄さんは時々普通の人に解らない様な事を出し抜けに云ひます。それが知らないものの耳や、教育の乏しい男の耳には、何處かに破目の入つた鐘の音として、變に響くでせうけれども、よく兄さんを心得た私には却て習慣的な言説よりは難有かつたのです。私は平生から其處に兄さんの特色を認めてゐました。だから心配の必要はないと、あれ程強くあなたに斷言して憚らなかつたのです。それで一所に旅に出ました。旅へ出てからの兄さんは今迄私に敘述して來た通りですが、私は此旅行先の兄さんの爲に、少しづつ、故の考へを訂正しなければならぬ様になつて來たのです。

私は兄さんの頭が、私より判然と整つてゐる事に就いて、今でも少しの疑ひを挟む餘地はないと思ひます。然し人間としての今の兄さんは、故に較べると、何處か亂れてゐるやうです。さうして其亂れる原因を考へて見ると、判然と整つた彼の頭の働き其物から來てゐるのです。私から云へば、整つた頭には敬意を表したいし、又亂れた心には疑ひを置きたいのですが、兄さんから見れば、整つた頭、取りも直さず亂

れた心なのです。私はそれで迷ひます。頭は確かである。然し氣はことによると少し變かも知れない。信用は出来る、然し信用は出来ない。斯う云つたら貴方はそれを満足な報道として受け取られるでせうか。それより外に云ひやうのない私は、自分自身で既に困つて仕舞つたのです。

私は梯子段をどん／＼馳け下りて行つた兄さんを其儘にして、ごろりと横になりました。私は夫程安心してゐたのです。帽子も被らずに出て行つた位だから、すぐ歸るに極まつてゐると考へたのです。然し兄さんは豫想通りさう手輕くは戻りませんでした。すると私もつひに大の字になつて居られなくなりました。私は仕舞に明らかな不安を抱いて起ち上がりました。

濱へ出ると、日は何時か雲に隠れてゐました。薄どんよりと曇り掛けた空と、其下にある磯と海が、同じ灰色を浴びて、物憂く見える中を、妙に生濇い風が磯臭く吹いて來ました。私は其灰色を彩どる一點として、向うの波打際に躊躇んでゐる兄さんの姿を、白く認めました。私は黙つて其方角へ歩いて行きました。私が後から聲を掛けた時、兄さんはすぐ立ち上がつて「先刻は失敬した」と云ひました。

兄さんは目的もなくまた留め度もなく其處いらを歩いた揚句、仕舞に疲れたなりに疲れた場所に躊躇んでしまつたのださうです。

「山に行かう。もう此處は厭になつた。山に行かう」
兄さんは今にも山へ行きたい風でした。

我々は其晩とうく山へ行く事になりました。山と云つても小田原からすぐ行かれる所は箱根の外にありません。私は此通俗な温泉場へ、最も通俗でない兄さんを連れ込んだのです。兄さんは始めから、屹度騒々しいに違ひないと云つて居ました。それでも山だから二三日は我慢出来るだらうと云ふのです。

「我慢しに温泉場へ行くなんて勿體ない話だ」

是も其時兄さんの口から出た自嘲の言葉でした。果して兄さんは着いた晩からして、八釜しい隣室の客を我慢しなければならなくなりました。此客は東京のものか横濱のものか解りませんが、何でも言葉の使ひやうから判断すると、商人とか請負師とか、仲買とかいふ部に属する種類の人間らしく思はれました。時々不調和に大きな聲を出します。傍若無人に騒ぎます。さういふ事に餘り頓着のない私さへ随分辟易しました。御蔭で其晩は兄さんも私も些とも六づかしい話しをしずしに寐て仕舞ひました。つまり隣の男が我の思索を破壊するために騒いだ事に當たるのです。

翌くる朝私兄さんに向つて、「昨夜は寐られたか」と聞きますと、兄さんは首を掉つて、「寐られる所か。君は實に羨ましい」と答へました。私は何うしても寐つかれない兄さんの耳に、さかんな鼾聲を終宵聞かせたのださうです。

其日は夜明から小雨が降つて居ました。それが十時頃になると本降りに變りました。午少し過ぎには、多少の暴れ模様さへ見えて來ました。すると兄さんは突然立ち上がつて尻を端折ります。是から山の中を歩くのだと云ひます。凄じい雨に打たれて、谷崖の容赦なく無暗に運動するのだと主張します。御苦勞千萬だとは思ひましたが、兄さんを思ひ留まらせるよりも、私が兄さんに賛成した方が、手数が省けますので、つい「宜からう」と云つて、私も尻を端折りました。

兄さんはすぐ呼吸の塞まるやうな風に向つて突進しました。水の音だか、空の音だか、何とも蚊とも嘯へられない響の中を、地面から跳ね上がる護謨球のやうな勢ひで、ほんく飛ぶのです。さうして血管の破裂する程大きな聲を出して、たゞわあつと叫びます。其勢ひは昨夜の隣室の客より何層倍猛烈だか分りません。聲だつて彼よりも遙かに野獸らしいのです。しかも其原始的な叫びは、口を出るや否や、すぐ風に攫つて行かれます。それを又雨が追ひ懸けて碎き盡くします。兄さんは暫くして沈黙に歸りました。けれどもまだ歩き廻りました。呼吸が切れて仕方なくなる迄歩き廻りました。

我々が濡れ鼠のやうになつて宿へ歸つたのは、出てから一時間目でしたらうか、又二時間目に懸かりましたらうか。私は臍の底まで冷えました。兄さんは唇の色を變へて居ました。湯に這入つて暖まつた時、兄さんはしきりに「痛快だ」と云ひました。自然に敵意がないから、いくら征服されても痛快なんでせう。私はたゞ「御苦勞な事だ」と云つて、風呂のなかで心持よく足を伸ばしました。

其晩は豫期に反して、隣の室がひつそりと静まつて居ました。下女に聞いて見ると、兄さんを惱ました。昨夕の容は、何時の間にかもう立つて仕舞つたのでした。私が兄さんから思ひ掛けない宗教観を聞かされたのは其宵の事です。私は一寸驚きました。

四十四

貴方も現代の青年だから宗教といふ古めかしい言葉に對してあまり同情は持つて居られないでせう。私も小六づかしい事は成るべく言はずに済ましたいのです。けれども兄さんを理解するためには、是非共其處へ觸れて來なければなりません。あなたには興味もなからうし、又意外でもあらうけれども、それを遠慮する以上、肝心の兄さんが不可解になる丈だから、辛防して此處のところを飛ばさずに讀んで下さい。辛抱さへなされば、貴方にはよく解る事なんです。讀んでさうして善く兄さんを呑み込んだ上、御老人方の合點の行かれるやうに御宅へ紹介して上げて下さい。私は兄さんに就いて過度の心勞をされる御年寄に對して實際御氣の毒に思つて居ます。然し今の處貴方を通してより外に、ありの儘の兄さんを、兄さんの家庭に知らせる手段はないのだから、貴方も少し眞面目になつて、聞き慣れない字面に眼を御注ぎ下さい。私は酔興で六づかしい事を書くのではありません。六づかしい事が活きた兄さんの一部分なのでから仕方がないのです。二つを引き離すと血や肉から出來た兄さんも亦存在しなくなるのです。

兄さんは神でも佛でも何でも自分以外に權威のあるものを建立するのが嫌ひなのです。(この建立といふ言葉も兄さんの使つた儘を、私が踏襲するのです。) それではニイチエのやうな自我を主張するのかといふと左右でもないのです。

「神は自己だ」と兄さんが云ひます。兄さんが斯う強い斷案を下す調子を、知らない人が蔭で聞いてると、少し變だと思ふかも知れません。兄さんは變だと思はれても仕方のないやうな激した云ひ方をします。

「ちや自分が絶対だと主張すると同じ事ぢやないか」と私が非難します。兄さんは動きません。「僕は絶対だ」と云ひます。

斯ういふ問答を重ねれば重ねる程、兄さんの調子は益變になつて來ます。調子ばかりではありません、云ふ事も次第に尋常を外れて來ます。相手が若し私のやうなものでなかつたならば、兄さんは最後迄行かないうちに、純粹な氣違ひとして早く葬られ去つたに違ひありません。然し私はさう容易く彼を見棄てる程に、兄さんを輕んじてはるませんでした。私はとう／＼兄さんを底迄押し詰めました。

兄さんの絶対といふのは、哲學者の頭から割り出された空しい紙の上の數字ではなかつたのです。自分で其境界に入つて親しく經驗する事の出來る判切した心理的のものだつたのです。

兄さんは純粹に心の落ち附きを得た人は、求めないでも自然に此境界に入れるべきだと云ひます。一度

此境界に入れば天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有るとも無いとも片の附かないものだと言ひます。偉大なやうな又微細なやうなものだと云ひます。何とも名の附け様のないものだと言ひます。即ち絶対だと云ひます。さうして其絶対を経験してゐる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は即ち自分だといふのです。言葉を換へて同じ意味を表はすと、絶対即相對になるのだといふのです。従つて自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らないのだと云ふのです。

「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。すべからく現代を超越すべしといつた才人は兎に角、僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」
兄さんは殆ど齒を喰ひしぼる勢ひで斯う言明しました。

四十五

私は此場合にも自分の頭が兄さんに及ばないといふ事を自白しなければなりません。私は人間として、果して兄さんのいふ様な境界に達せられべきものを未だ考へてゐなかつたのです。明瞭な順序で自然其處に歸着して行く兄さんの話を聞いた時、成程そんなものかとも思ひました。又そんなものでも無からうかとも思ひました。何しろ私は兎角の是非を扱む丈の資格を有つてゐない人間に過ぎませんでした。私は

黙々として熱烈な言葉の前に坐りました。すると兄さんの態度が變りました。私の沈黙が鋭い兄さんの鋒先を鈍らせた例は、今迄にも何遍かありました。さうして夫が悉く偶然から來てゐるのです。尤も兄さんの様な聰明な人に、一種の思はくから黙つて見せるといふ技巧を弄したら、すぐ觀破されるに極まつてゐますから、私の鈍いのも時には一得になつたのでせう。

「君、僕を單に口舌の人と輕蔑して呉れるな」と云つた兄さんは、急に私の前に手を突きました。私は挨拶に窮しました。

「君のやうな重厚な人間から見たら僕は如何にも輕薄な御喋舌に違ひない。然し僕は是でも口で云ふ事を實行したがつてゐるんだ。實行しなければならぬと朝晩考へ續けに考へてゐるんだ。實行しなければ生きてゐられないと迄思ひ詰めてゐるんだ」

私は依然として挨拶に困つた儘でした。

「君、僕の考へを間違つてゐると思ふか」と兄さんが聞きました。

「左右は思はない」と私が答へました。

「徹底してゐないと思ふか」と兄さんが又聞きました。

「根本的の様だ」と私が又答へました。

「然し何うしたら此研究的な僕が、實行的な僕に變化出来るだらう。どうぞ教へて呉れ」と兄さんが頼

むのです。

「僕にそんな力があるものか」と、思ひも寄らない私は斷るのです。

「いやある。君は實行的に生れた人だ。だから幸福なんだ。さう落ち附いてゐられるんだ」と兄さんが繰り返すのです。

兄さんは眞劍のやうでした。私は其の時無然として兄さんに向ひました。

「君の智慧は遙かに僕に優つてゐる。僕には到底君を救ふ事は出来ない。僕の力は僕より鈍いものになら、或は及ぼし得るかも知れない。然し僕より聰明な君には全く無効である。要するに君は瘡せて丈が長く生れた男で、僕は肥えてすんぐり育つた人間なんだ。僕の眞似をして肥らうと思ふなら、君は君の脊丈を縮めるより外に途はないんだらう」

兄さんは眼からほろ／＼涙を出しました。

「僕は明らかに絶對の境地を認めてゐる。然し僕の世界觀が明らかになればなる程、絶對は僕と離れて仕舞ふ。要するに僕は圖を披いて地理を調査する人だつたのだ。それでゐる脚絆を着けて山河を跋涉する實地の人と、同じ經驗をしようと思つてゐるのだ。僕は迂濶なのだ。僕は矛盾なのだ。然し迂濶と知り矛盾と知りながら、依然として藻掻いてゐる。僕は馬鹿だ。人間としての君は遙かに僕よりも偉大だ」

兄さんは又私の前に手を突きました。さうして恰も謝罪でもする時のやうに頭を下けました。涙がほたりほたりと兄さんの眼から落ちました。私は恐縮しました。

四十六

箱根を出る時兄さんは「二度と斯んな所は御免だ」と行ひました。今迄通つて來たうちで、兄さんの氣に入つた所はまだ一ヶ所もありません。兄さんは誰と何處へ何つても直ぐ厭になる人なのでせう。夫も其筈です。兄さんには自分の身軀や自分の心からしてが既に氣に入つてゐないのですから。兄さんは自分の身軀や心が自分を裏切る曲者の様に云ひます。それが徒爾半分の開放題でない事は、今日迄一所に寐泊りの日数を重ねた私にはよく理解出來ます。其私から有りの儘の報知を受ける貴方にも篤と御合點が行く事だらうと思ひます。

斯ういふ兄さんと、私がよく一所に旅が出來ると御思ひになるかも知れませんが、私にも考へると、それが不思議な位です。兄さんを上に述べた様に頭の中へ疊み込んだが最後、如何に遲鈍な私だつて、御相手は出來悪い譯です。然し事實私は今兄さんと斯うして差向ひで暮らしてゐるながら、左程に苦痛を感じてはゐらないのです。少なくとも傍で想像するよりは餘程樂なのだらうと考へてゐます。さうして夫を何故だと聞かれたら、一寸返答に差支へるのです。貴方も同じ兄さんに就いて同じ經驗をなさりはしませんか。若し同じ經驗をなさらないならば、骨肉を分けた貴方よりも、他人の私の方が、兄さんに親しい性質を有

つて生れて来たのでせう。親しいといふのは、たゞ仲が好いと云ふ意味ではありません。和して納まるべき特性をどこか相互に分擔して前へ進めるといふ積りなのです。

私は旅へ出てから絶えず兄さんの氣に障る様な事を云つたり爲たりしました。ある時は頭さへ打たれました。それでも私は貴方の家庭の凡ての人の前に立つて、私はまだ兄さんから愛想を盡かされてゐないといふ事を明言出来ると思ひます。同時に、一種の弱點を持つた此兄さんを、私は今でも衷心から敬愛してゐると固く信じて疑はないのであります。

兄さんは私のやうな凡庸な者の前に、頭を下けて涙を流す程の正しい人です。それを敢てする程の勇氣を有つた人です。それを敢てするのが當然だと判斷する丈の識見を具へた人です。兄さんの頭は明らか過ぎて、やゝともすると自分を置き去りにして先へ行きたがりです。心の他の道具が彼の理智と歩調を一つにして前へ進めない所に、兄さんの苦痛があるのです。人格から云へば其處に隙間があるのです。成效から云へば其處に破滅が潜んでゐるのです。此不調和を兄さんの爲に悲しみつゝある私は、凡ての原因をあまりに働き過ぎる彼の理智の罪に歸しながら、やつぱり、其理智に對する敬意を失ふ事が出来ないのです。兄さんを唯の氣六づかしい人、唯の我儘な人とばかり解釋してゐては、何時迄経つても兄さんに近寄る機會は來ないかも知れません。従つて少しでも兄さんの苦痛を柔らげる縁は、永劫に去つたものと見なければなりません。

我々は前申した通り箱根を立ちました。さうして直ぐに此紅ヶ谷の小別荘に入りました。私は其前一寸國府津に泊つて見る積りで、暗に一人極めのプログラムを立ててゐたのですが、とう／＼兄さんにはそれを云ひ出さずに仕舞つたのです。國府津でもまた「二度と斯んな所は御免だ」と怒られさうでしたから、其上兄さんは私から此別荘の話聞いて、しきりに其處へ落ち附きたがつてゐたのです。

四十七

何にでも刺激され易い癖に、何んな刺激にも堪へ切れないと云つた風の、今の兄さんには、草庵めいた此別荘が最も適してゐたのかも知れません。兄さんは物靜かな座敷から、谷一つ隔てて向うの崖の高い松を見上げた時、「好いな」と云つて其處へ腰を卸ろしました。

「あの松も君の所有だ」

私は慰めるやうな句調で、わざと兄さんの口吻を眞似て見せました。修善寺では頓と解らなかつた「あの百合は僕の所有だ」とか「あの山も谷も僕の所有だ」とか云つた兄さんの言葉を想ひ出したからです。別荘には留守番の爺さんが一人居ましたが、是は我々と出違ひに自分の宅へ歸りました。夫でも拭き掃除のためや水を汲むために朝夕一度位づゝは必ず來て呉れます。男二人の事ですから、煮炊は無論出來ません。我々は爺さんに頼んで近所の宿屋から三度々々食事を運んで貰ふ事にしました。夜は電燈の設備が

ありますから、洋燈を點す手数は要らないのです。斯ういふ譯で、朝起きてから夜寐る迄に、我々の是非遣らなければならぬ事は、まあ床を延べて蚊帳を釣る位なものです。

「自炊よりも氣樂で閑靜だね」と兄さんが云ひます。實際今迄通つて来た山や海のうちで、此處が一番靜かに違ひないので。兄さんと差向ひで黙つてゐると、風の音さへ聞こえない事があります。多少八釜しいと思ふのは珊瑚樹の葉隠れにぎい／＼軋る隣の家井戸の響ですが、兄さんは案外それには無頓着です。兄さんは段々落ち附いて來るやうです。私はもつと早く兄さんを此處へ連れて來れば好かつたと思ひました。

庭先に少しばかりの畠があつて、其處に茄子や唐もろこしが作つてあります。此茄子を挽いで食はうかと相談しましたが、漬物に拵へるのが面倒なので、つひ已めにしました。唐もろこしは未だ食べられる程實が入りません。勝手口の井戸の傍に、トマトが植ゑてあります。それを朝、顔を洗ふ序に、二人で食ひました。

兄さんは暑い日盛りに、此庭だか畑だか分らない地面の上に下りて、凝と蹲んでゐる事があります。時々かんなの花の香を嗅いで見たりします。かんなに香なんかありません。凋んだ月見草の花片を見詰めてゐる事もあります。着いた日杯は左隣の長者の別荘の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐました。私は座敷から其様子を眺めてゐましたが、何時迄経つても兄さんが動かないので、仕舞に縁

先にある草履を突掛けて、わざ／＼傍へ行つて見ました。隣と我々の住居との仕切りになつてゐる其處は、高さ一間位の土堤で、時節柄一面の薄が蔽ひ被さつてゐるのです。兄さんは近づいた私を顧て、下の方にある薄の根を指さしました。

薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位の大きしかありません。それが一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです。仕舞には彼處にも此處にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな觀察をして、まだ動かずに立つてゐます。私は兄さんを其處へ殘して又故の席へ歸りました。

兄さんが斯ういふ些細な事に氣を取られて、殆ど我を忘れるのを見る私は、甚だ愉快です。是でこそ兄さんを旅行に連れ出した甲斐があると思ふ位です。其晩私は其意味を兄さんに話しました。

四十八

「先刻君は蟹を所有してゐたぢやないか」

私が兄さんに突然斯う云ひ掛けますと、兄さんは珍らしくあは／＼と聲を立てて愉快さうに笑ひました。

修善寺以後、私が時々所有といふ言葉を、妙な意味に使つて見せるので、單にそれを滑稽と解釋してゐる兄さんには可笑しく響くのでせう。可笑しがられるのは、怒られるよりも餘つ程増しますが、事實私の方ではもつと眞面目なものでした。

「絶対に所有してゐるのだらう」と私はすぐ云ひ直しました。今度は兄さんも笑ひませんでした。然しまだ何とも答へません。口を開くのは矢張り私の番でした。

「君は絶対々と云つて、此間六づかしい議論をしたが、何もさう面倒な無理をして、絶対なんかに入らぬ必要はないぢやないか。あゝいふ風に蟹に見惚れてさへるれば、少しも苦しくはあるまいがね。まづ絶対を意識して、それから其絶対が相對に變る刹那を捕へて、そこに二つの統一を見出だすなんて、随分骨が折れるだらう。第一人間に出来る事か何だか夫さへ判然しやしない」

兄さんはまだ私を遮らうとはしません。何時もよりは大分落ち附いてゐる様でした。私は一步先へ進みました。

「それより逆に行つた方が便利ぢやないか」

「逆とは」

斯う聞き返す兄さんの眼には誠が輝いてゐました。

「つまり蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と對象とがぴたりと合へば、君の云ふ通りになるぢや

ないか」

「左右かな」

兄さんは心元なささうな返事をしました。

「さうかなつて、君は現に實行してゐるぢやないか」

「成程」

兄さんの此言葉はやはり茫然たるものでした。私は此時不圖自分が今迄餘計な事を云つてゐたのに氣が附きました。實を云ふと、私は絶対といふものを丸で知らないのです。考へもしなかつたのです。想像もした覚えがないのです。たゞ教育の御蔭でさう云ふ言葉を使ふ事を知つてゐたのです。けれども私は人間として兄さんよりも落ち附いてゐました。落ち附いてゐるといふ事が兄さんより偉いといふ意味に聞かえては面目ない位なものですから、私は兄さんより普通一般に近い心の状態を有つてゐたと云ひ直させう。朋友として私の兄さんに向つて働き掛ける仕事は、だから唯兄さんを私のやうな人並な立場に引き戻す丈なのです。然しそれを別な言葉で云つて見ると非凡なものを平凡にするといふ馬鹿氣な意味にもなつて來ます。もし兄さんの方で苦痛の訴へがないならば、私のやうなものが、何で兄さんにこんな問答を仕懸けませう。兄さんは正直です。腑に落ちなければ何處迄も問ひ詰めて來ます。問ひ詰めて來られば、私には解らなくなりません。それ丈ならまだしもですが、斯ういふ批評的な談話を交換してゐると、折角

實行的になりかけた兄さんを、又もとの研究的態度に戻して仕舞ふ恐れがあるのです。私は何より先にそれを氣遣ひました。私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡くして、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間斷なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絶対に物から所有される事、即ち絶対に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落ち附けるのでせう。

四十九

一昨日の晩は二人で濱を散歩しました。私たちの居る所から海邊迄は約三丁もあります。細い道を通つて、一旦街道へ出て、また夫を横切らなければ海の色は見えないのです。月の出にはまだ間がある時刻でした。波は存外暗く動いてゐました。眼がなれる迄は、水と磯との境目が判然分らないのです。兄さんは其中を容赦なくすん／＼歩いて行きます。私は時々生温い水に足下を襲はれました。岸へ寄せる波の餘りが、のし餅の様に平らに擴がつて、思ひの外遠く迄押し上げて來るのです。私は後から兄さんに「下駄が濡れやしないか」と聞きました。兄さんは命令でも下すやうに「尻を端折れ」と云ひました。兄さんは先

刻から足を汚す覺悟で、尻を端折つてゐたものと見えます。二三間離れた私にはそれが分らない位四圍が暗いのでした。けれども時節柄なんでせう、避暑地丈あつて人に會ひます。さうして會ふ人も會ふ人も、必ず男女二人連に限られてゐました。彼等は申し合はせた様に、黙つて闇の中を辿つて來ます。だから忽然私たちの前へ現はれる迄は、丸で氣がつかないのです。彼等が摺り抜けるやうに私たちの傍を通つて行く時、眼を上げて物色すると、どれも是も若い男と女ばかりです。私は斯ういふ一對に何度か出合ひました。

私が兄さんからお貞さんといふ人の話を聞いたのは其時の事でした。お貞さんは近頃大阪の方へ御嫁に行つたんださうですから、兄さんは其宵に出逢つた幾組かの若い男や女から、お貞さんの花嫁姿を連想でもしたのでせう。

○ 兄さんはお貞さんを宅中で一番窓の寡ない善良な人間だと云ふのです。あゝ云ふのが幸福に生れて來た人間だと云つて羨ましがるのです。自分もあゝなりたいたいと思ふのです。お貞さんを知らない私は、何とも評しやうがありませんから、只さうかくと答へて置きました。すると兄さんが「お貞さんは君を女にしたやうなものだ」と云つて砂の上へ立ち留まりました。私も立ち留まりました。

向うの高い所に微かな燈火が一つ眼に入りました。晝間見ると、其見當に赤い色の建物か樹の間隠れに眺められますから、此燈火も大方其赤い洋館の主が點けてゐるのでせう。濃い夜陰の色の中になつた一つ

懸け離れて星のやうに光つてゐるのです。私の顔は其燈火の方を向いてゐました。兄さんは又浪の來る海をまともに受けて立ちました。

其時二人の頭の上で、ピアノの音が不意に起りました。其處は砂濱から一間の高さに、石垣を規則正しく積み上げた一構で、庭から濱へぢかに通へるためせう、石垣の端には階段が筋違に庭先迄刻み上げてありました。私は其石段を上りました。

庭には家を洩れる電燈の光が、線のやうに落ちてゐました。其弱い光で照らされてゐた地面は一體の芝生でした。花もあちこちに咲いてゐるやうでしたが、是は暗い上に廣い庭なので、判然とは分りませんでした。ピアノの音は正面に見える洋館の、明るく照らされた一室から出るやうでした。

「西洋人の別荘だね」

「左右だらう」

兄さんと私は石段の一番上の所に竝んで腰を掛けました。聞こえない様な又聞こえるやうなピアノの音が、時々二人の耳を掠めに來ます。二人共無言でした。兄さんの吸ふ煙草の先が時々赤くなりました。

五十

私はお貞さんのつゞきでも出る事と思つて、暗い中でそれとなく兄さんの聲を待ち受けてゐたのですが、

兄さんは煙草に魅せられた人の様に、時々紙巻の先を赤くする丈で、中々口を開きません。それを石段の下へ投げて私の方へ向いた時は、もう話題がお貞さんを離れてゐました。私は少し意外に思ひました。兄さんの題目は、お貞さんに關係のない計りか、ピアノの音にも、廣い芝生にも、美しい別荘にも、乃至は避暑にも旅行にも、凡て我々の周圍と現在とは全く交渉を絶つた昔の坊さんの事でした。

坊さんの名はたしか香嚴とか云ひました。俗にいふ一を問へば十を答へ、十を問へば百を答へるといつた風の、聰明靈利に生れ附いた人なのだそうです。所が其聰明靈利が悟道の邪魔になつて、何時迄経つても道に入れなかつたと兄さんは語りました。悟を知らない私にも此意味はよく通じます。自分の智慧に苦しむ抜いてゐる兄さんには猶更痛切に解つてゐるでせう。兄さんは「全く多知多解が煩をなしたのだ」ととくに注意した位です。

數年の間百丈禪師とかいふ和尚さんに就いて參禪した此坊さんは遂に何の得る所もないうちに師に死なれて仕舞つたのです。それで今度は瀟山といふ人の許に行きました。瀟山は御前のやうな意解識想を振り舞はして得意がる男はとても駄目だと叱り附けたさうです。父も母も生れない先の姿になつて出て來いと云つたさうです。坊さんは寮舎に歸つて、平生讀み破つた書物上の知識を残らず點檢した揚句、あゝ、晝に描いた餅はやはり腹の足しにならなかつたと嘆息したと云ひます。そこで今迄集めた書物をすつかり焼き棄てて仕舞つたのです。

「もう諦めた。是からはたゞ粥を啜つて生きて行かう」

斯う云つた彼は、それ以後禪のぜの字も考へなくなつたのです。善も投げ悪も投げ、父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し盡くして仕舞つたのです。それからある閑寂な所を選んで小さな庵を建てる氣になりました。彼はそこにある草を芟りました。そこにある株を掘り起しました。地ならしをするために、そこにある石を取つて除けました。すると其石の一つが竹藪に中たつて憂然と鳴りました。彼は此朗らかな響を聞いて、はつと悟つたさうです。さうして一撃に所知を亡ふと云つて喜んだといひます。

「何うかして香嚴になりたい」と兄さんが云ひます。兄さんの意味はあなたにも好く解るでせう。一切の重荷を卸ろして樂になりたいのです。兄さんは其重荷を預かつて貰ふ神を有つてゐないのです。だから掃溜か何かへ棄てて仕舞ひたいと云ふのです。兄さんは聰明な點に於てよく此香嚴といふ坊さんに似てゐます。だから猶のこと香嚴が羨ましいのでせう。

兄さんの話は西洋人の別荘や、ハイカラな樂器とは、全く縁の遠いものでした。何故兄さんが暗い石段の上で、磯の香を嗅ぎながら、突然こんな話をし出したか、それは私には解りません。兄さんの話が濟んだ頃はピアノの音ももう聞こえませんでした。潮に近いためか、夜露の所爲か、浴衣が濕つぽくなつてゐました。私は兄さんを促して又故の道を引き返しました。往來へ出た時、私は行きつけの菓子屋へ寄つて饅頭を買ひました。それを食ひながら暗い中を黙つて宅迄歸つて來ました。留守を頼んで置いた爺さんの所の子供は、蚊に喰はれるのも構はずぐうぐ寐てゐました。私は饅頭の餘りを遣つて、すぐ子供を歸してやりました。

五十一

昨日の朝食事をした時、飯櫃を置いた位地の都合から、私が兄さんの茶碗を受けとつて、一膳目の御飯をよそつてやりますと、兄さんは又お貞さんの名を私の耳に訴へました。お貞さんがまだ嫁に行かないうちは、丁度今私がしたやうに、始終兄さんの御給仕をしたものださうですね。昨夜は性格の點からお貞さんに比較され、今朝は又御給仕の具合で同じお貞さんにたとへられた私は、つい兄さんに向つて質問を掛けて見る氣になりました。

「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」

兄さんは黙つて箸を口へ持つて行きました。私は兄さんの態度から推して、大方返事をするのが厭なんだらうと考へたので、それぎり後を推しませんでした。すると兄さんの答が、御飯を二口三口嚙み下したあとで、不意に出て來ました。

「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」

兄さんの言葉は如何にも論理的に終始を貫いて真直に見えます。けれども暗い奥には矛盾が既に漂つて
ります。兄さんは何にも拘泥してゐない自然の顔を見ると感謝したくなる程嬉しいと私に明言した事があ
るのです。それは自分が幸福に生れた以上、他を幸福にする事も出来ると云ふのと同じ意味ではありませ
んか。私は兄さんの顔を見てにや／＼笑ひました。兄さんはさうなると只では済まされぬ男です。すぐ
食ひ附いて來ます。

「いや本當にさうなのだ。疑られては困る。實際僕の云つた事は云つた事で、云はない事は云はない事
なんだから」

「私は兄さんに逆らひたくはありませんでした。けれども是程頭の明らかな兄さんが、自分の平生から
輕蔑してゐる言葉の上の論理を弄んで、平氣でゐるのは少し可笑しいと思ひました。それで私の腹にあつ
た兄さんの矛盾を遠慮なく話して聞かせました。

兄さんは又無言で飯を二口程頬張りました。兄さんの茶碗は其時空になりましたが、飯櫃は依然として
兄さんの手の届かない私の傍にありました。私はもう一遍給仕をする考へで、兄さんの鼻の先へ手を出し
たのです。所が今度は兄さんが應じません。此方へ寄こして呉れと云ひます。私は飯櫃を向うへ押して遣
りました。兄さんは自分でしやも子を取つて、飯をてこ盛にもり上げました。それから其茶碗を膳の上に
置いた儘、箸も執らずに私に問ひ掛けるのです。

「君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つてゐるのか」

斯うなると私にはおいそれと返事が出来なくなりませう。平生そんな事を考へて見ないからでもありませ
うが。今度は私の方が飯を二口三口立て續けに頬張つて、兄さんの説明を待ちました。

「嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の
爲にスボイルされて仕舞つてゐる」

「一體何んな人の所へ嫁に行つたのかね」と私が途中で聞きました。

「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何
の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押しが強過ぎるぢやないか。幸福は
嫁に行つて天真を損なはれた女からは要求出来るものぢやないよ」

兄さんはさういふや否や、茶碗を取り上げて、むしや／＼とこ盛りの飯を平けました。

五十二

私は旅行に出てから今日に至る迄の兄さんを、是で出来る丈委しく書いた積りです。東京を立つたのは
つい昨日のやうですが、指を折るともう十日あまりになります。私の音信を宛にして待つて居られる貴方
や御年寄には、此十日が少し長過ぎたかも知れませぬ。私もそれは察してゐます。然し此手紙の冒頭に御

断りしたやうな事情のために、此處へ来て落ち附く迄は、殆ど筆を執る餘裕がなかつたので、已むを得ず遅れました。其代り過去十日間のうち、此手紙に漏れた兄さんは一日もありません。私は念を入れて其日其日の兄さんを悉く此一封のうちに書き込めました。それが私の申し譯です。同時に私の誇りです。私は當初の豫期以上に、私の義務を果たし得たといふ自信のもとに、此手紙を書き終るのでありますから。

私の費やした時間は、時計の針で仕事の分量を計算して見ない努力だから、數字としては申し上げられませんが、随分の骨折りには違ひありませんでした。私は生れて始めてこんな長い手紙を書きました。無論一氣には書けません、一日にも書けません。ひまの見附かり次第機に向つて書き掛けたあとを書き續けて行つたのです。然し夫は何でもありません。もし私の見た兄さんと、私の理解した兄さんが、此一封のうち動いてゐるならば、私は今より數層倍の手数と努力を費やしても厭はない積りです。

私は私の親愛するあなたの兄さんのために此手紙を書きます。それから同じく兄さんを親愛する貴方のために此手紙を書きます。最後には慈愛に充ちた御年寄、あなたと兄さんの御父さんや御母さんのためにも此手紙をかきます。私の見た兄さんは恐らく貴方方の見た兄さんと違つてゐるでせう。私の理解する兄さんも亦貴方方の理解する兄さんではありません。もし此手紙が此努力に價するならば、其價は全くそこにあると考へて下さい。違つた角度から、同じ人を見て別様の反射を受けた所にあると思つて御參考になさい。

あなた方は兄さんの將來に就いて、とくに明瞭な知識を得たいと御望みになるかも知れませんが、豫言者でない私は未來に喙を挟む資格を持つて居りません。雲が空に薄暗く被さつた時、雨になる事もありますし、又雨にならずに濟む事もあります。たゞ雲が空にある間、日の目の拜まれないのは事實です。あなた方は兄さんが傍のものを不愉快にすると云つて、氣の毒な兄さんに多少非難の意味を持たせて居る様ですが、自分が幸福でないものに、他を幸福にする力がある筈がありません。雲で包まれてゐる太陽に、何故暖かい光を與へないかと逼るのは、逼る方が無理でせう。私は斯うして一所にゐる間、出来る丈兄さんの爲に此雲を拂はうとしてゐます。貴方方も兄さんから暖かな光を望む前に、まづ兄さんの頭を取り巻いてゐる雲を散らして上げた可いでせう。もし夫が散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出来るかも知れません。兄さん自身にとつても悲しい結果になるでせう。斯ういふ私も悲しう御座います。私は過去十日間の兄さんを書きました。此十日間の兄さんが、未來の十日間に何うなるかが問題で、その問題には誰も答へられないのです。よし次の十日間を私が受け合ふにした所で、次の一ヶ月、次の半年の兄さんを誰が受け合へませう。私はたゞ過去十日間の兄さんを忠實に書いた丈です。頭の鋭くない私が、読み直すひまもなく唯書き流したものだから、そのうちには定めて矛盾があるでせう。頭の鋭い兄さんの言行にも氣の附かない所に矛盾があるかも知れません。けれども私は斷言します。兄さんは眞面目です、決して私を胡魔化さうとしては居ません。私も忠實です。貴方を欺く氣は毛頭ないのです。

私が此手紙を書き始めた時、兄さんはぐうぐう寐てゐました。此手紙を書き終る今も亦ぐうぐう寐てゐます。私は偶然兄さんの寐てゐる時に書き出して、偶然兄さんの寐てゐる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠りから永久覺めなかつたら嘸幸福だらうといふ氣が何處かです。同時にもし此眠りから永久覺めなかつたら嘸悲しいだらうといふ氣も何處かです」

(大森製本)

昭和四年三月廿日印刷
昭和四年三月廿五日發行

漱石全集第八卷

著作權者

夏 目 純 一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區南神保町十六番地
岩 波 茂 雄

印刷者

東京市本所區番場町四番地
井 上 源 之 丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社分工場

566
49

